

関西支部 2019 年春季総会・研究発表会 (6 月 15 日土曜日)

於：関西大学千里山キャンパス岩崎記念館 4 階 F401 教室

進行役：事務局

*** 運営委員会 (13:30~14:15) 岩崎記念館 4 階 F402 教室**

◇ 開会の言葉：14:30 中村支部長

◇ 発表 1：14:35~15:10

発表者：占部 歩 氏

題目：ヴィクトル・ペレーヴィン『帝国 V』におけるナポレオンと馬車の
メタファーについて —葛藤と劣等感によるアイデンティティ形成—

司会：中村 唯史 氏

◇ 発表 2：15:10~15:45

発表者：松下 隆志 氏

題目：ティムール・ノヴィコフと現代ペテルブルグ文化

司会：ヨコタ村上 孝之 氏

◇ 休憩 (10分)

◇ 発表 3：15:55~16:30

発表者：北井 聡子 氏

題目：『白痴』における〈斬首の光景〉

司会：大平 陽一 氏

◇ 休憩 (15分)

◇ 支部総会：16:45~17:30

◇ 閉会の言葉：17:30 中村支部長

◎ 懇親会 (17:45から)

◇ 占部歩 氏 (大阪大学言語文化研究科)

題目：ヴィクトル・ペレーヴィン『帝国V』におけるナポレオンと馬車のメタファーについて —葛藤と劣等感によるアイデンティティ形成—

発表要旨：

本発表は、ヴィクトル・ペレーヴィンの長編『帝国V』(2008)における、メタファーを用いた自己イメージの表象と、アイデンティティの形成過程の関連を考察するものである。この作品はひょんなことから吸血鬼へと変身した主人公が、自身が新たに加わることとなった吸血鬼の社会において自己を確立していく過程を描くものであるが、変身のきっかけも「エリート階級への仲間入り」をうたう広告に惹かれたためであり、その意味では作品全体がアイデンティティ形成というテーマに貫かれているといえる。

具体的な発表内容としては、作品中に登場する「ナポレオンと、彼を運ぶ馬車」というメタファーを分析し、それを理解出来ない主人公に対する「お前はまだ人間のように考える」という批判を軸に、作品中に表象されるアイデンティティの在り方について検討する。詳述すれば、この作品における吸血鬼とは、人間が「舌(ЯЗЫК)」と呼ばれる器官と同化することによって変身するものであり、吸血鬼自身は本質的にはその舌に従属する存在とされ、それが先述のメタファーを用いて描写される。そしてそれを受け入れられない主人公は、「人間のように考える」ことをたしなめられるのである。

発表では、ナポレオンと馬車というメタファーを通して、吸血鬼と舌、人間と吸血鬼という二種類の対立するアイデンティティが示され、主人公はそれらに起因する葛藤を通じて自己形成を行うことを論じる。本発表では葛藤を、対立要素の認識を通じた自己イメージの獲得とそれらの統合の努力を指すものと捉え、アイデンティティ形成の過程におけるその重要性について論証することを目指す。また、主人公がどちらの対立においても下位の要素に属するとされていることから、アイデンティティ形成と劣等感との関わりについても考察する。その際メタファーとアイデンティティについて論じたキャメロン、フォースヴィルら言語学者の先行研究を適宜参照し、分析を行っていく。

◇ 松下隆志 氏 (京都大学非常勤講師)

題目：ティムール・ノヴィコフと現代ペテルブルグ文化

発表要旨：

ソ連崩壊後に流行したポストモダニズムは、90年代のロシアを象徴する一大文化潮流となった。しかし、ボリス・グロイスやミハイル・エプシテインの主張に顕著のように、ロシア版ポストモダニズムの理論はロシア文化全般というより、1970~80年代のモスクワの非公式文化——狭義においては「モスクワ・コンセプチュアリズム」——から決定的な影響を受けており、ロシア版のポストモダニズムはしばしばモスクワ・コンセプチュアリズムと同一視されることすらある。

とはいえそれは、同時代の他の都市にモスクワに匹敵する非公式文化が存在しなかった

ことを意味するものではない。たとえばレニングラードには、「ミチキー」、「ネクロリアリズム」、「ニュー・アカデミー」といった重要なグループや潮流が存在していた。さらに、ロックバンド「キノー」、セルゲイ・クリョーヒンの「ポップ・メハニカ」、映画『アッサ』(1987)など、今日のポップカルチャーに与えた影響という意味ではモスクワを凌ぐ面もある。言語や概念よりイメージを重視する反コンセプチュアリズム的な性格から今日に至るまで十分な研究が行われてきたとは言えないが、2017年には芸術家で芸術学者のアンドレイ・フロブイスチンが20世紀後半のペテルブルグ文化について論じた『スキゾ革命』が出版されるなど、本格的な研究が待たれている。

本報告では、現代ペテルブルグ文化研究の端緒として、80～90年代のペテルブルグ芸術において中心的な役割を果たした芸術家ティムール・ノヴィコフ(1958–2002)の創作活動を概観する。ノヴィコフは上述の「ニュー・アカデミー」の提唱者であるほか、映画『アッサ』には美術・俳優として参加し、90年代にはレイヴやゲイ文化の創始者としても知られた。2002年に惜しくも病没しているが、彼の多方面にわたる創作活動の分析を通じて、モスクワとは異なる発展を遂げたペテルブルグ文化の独自性を明らかにしたい。

◇ 北井聡子 氏 (大阪大学)

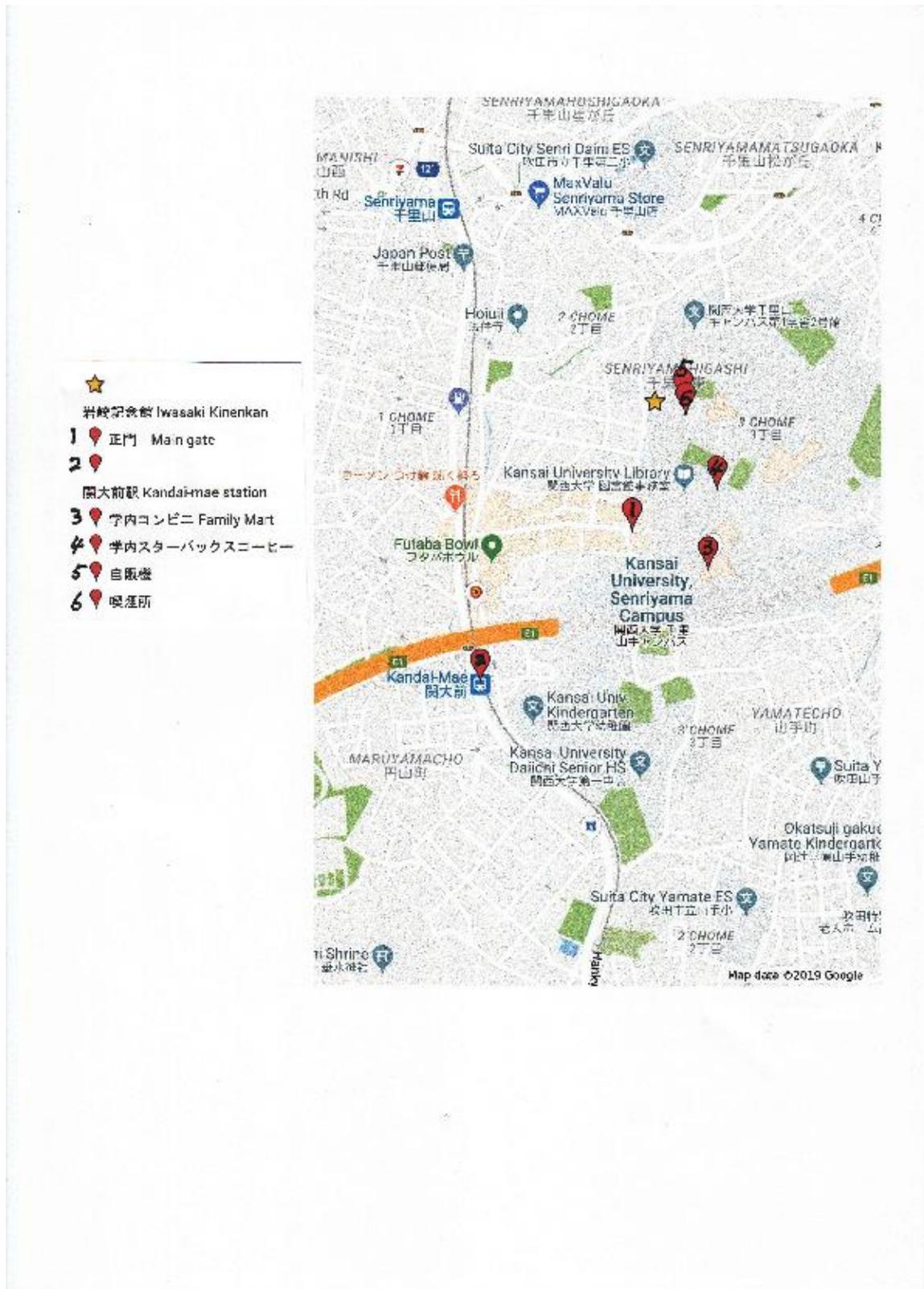
題目：『白痴』における〈斬首の光景〉

発表要旨：

ドストエフスキーの『白痴』には、切断された頭部のイメージが何度か出てくる。それはムィシキンが、かつてフランスでみたギロチンの光景、そしてフェルデシチェンコの無実を証明する為なら「自分の首をもぎ取り皿に載せることも厭わない」とレーベジェフが誓う場面である(第3篇9節)。1つ目は、絶対的な恐怖、絶望の瞬間の記憶であるのに対し、後者の頭部の切断は、ある種の歓喜の瞬間として描かれている。この報告で扱いたいのは、2つの目の奇妙な斬首のシーンである。このレーベジェフの首の切断は、ギロチンがもたらす死の恐怖を無化し、価値を転覆するようなものとなっていると言えないだろうか。そして、また注目したいのはレーベジェフのこの行為が、ナスターシャの存在をパロディ化するような役割も果たしているということだ。つまりナスターシャは、男たちの間を循環することで、彼らの絆を媒介し、また破壊する機能を果たしているのに対し、レーベジェフの頭部は、逆に人々の間を循環する女や金の流れを食い止める役割を帯びている。

さて、こういった切断された頭部のイメージは、周知のように精神分析においては、「メデューサの首」に代表されるような去勢不安を表すものとして解釈されてきた。ジュリア・クリステヴァは、この議論をさらに一歩すすめて、「頭部崇拜」は、「メランコリーの源泉としての、母の原初的喪失と、そして、父による去勢の脅威としての男根的試練である」(『斬首の光景』26頁)とし、ここに投影されたアンビバレントな父と母の両方の意味を読み込んでいる。本報告ではこういった理論を参照しつつ、この〈斬首の光景〉が小説の中でどのように機能しているのか考察してみたい。

会場案内



<https://www.google.com/maps/d/edit?mid=zzakArenWGlg.kBstOFL4P8js&usp=sharing>